要　　約

報告番号	㊙甲 乙 第　　号	氏　名	松　原　佑　太

主 論 文 題 名

Gastrointestinal symptoms in COVID-19 and disease severity: a Japanese registry-based retrospective cohort study
（COVID-19における消化器症状と重症度: 日本の登録に基づく後ろ向きコホート研究）

（内 容 の 要 旨）

新型コロナウイルス感染症（The Coronavirus Disease 2019: COVID-19）は、2019年12月に中国で原因不明の肺炎の集団感染として報告され、その後世界的な流行を引き起こした。COVID-19の症状は軽症から生命を脅かすほどの重症まで様々である。主に呼吸器を中心に症状を起こす疾患であるが、心血管障害、腎障害、肝障害、消化器症状など、多様な症状を引き起こすこともある。これまでに消化器症状とCOVID-19の重症度との関連性を調査した多くの研究が発表されているが、その結論は研究によって様々であり一貫した結論は出ていない。そこで本研究では、全国的な日本のCOVID-19レジストリに基づく研究を行い、潜在的な交絡因子を調整した上で、消化器症状が日本人のCOVID-19患者の予後に影響を与えるかどうかを調査することを目的とした。

COVID-19の全国登録データから患者データを収集し、後ろ向きコホート研究を実施した。2020年2月から2022年8月までに74施設で診断された3498人の日本人COVID-19患者のデータを分析した。入院患者は退院または他院への転院まで追跡した。外来患者は治療終了まで観察した。多変量ロジスティック回帰分析を用いて、消化器症状と臨床転帰との関連を調査した。

下痢、嘔気・嘔吐、腹痛、血便が生じた患者の割合はそれぞれ、16.6%（581人/3498人）、8.9%（311人/3498人）、3.5%（121人/3498人）、0.7%（23人/3498人）であった。単変量解析では、下痢症状のある患者では、下痢のない患者と比較して、集中治療室（ICU）への入院率が低かった(15.7%対20.6% 、p = 0.006)。また同様に下痢症状のある患者はない患者と比較し、人工呼吸器の使用率も低かった。(7.9%対11.4% 、p = 0.013)。多変量ロジスティック回帰分析では、下痢症状がある患者は、ICU入院の可能性が低いこと（調整オッズ比 0.70、95%信頼区間 0.53–0.92）、および人工呼吸器の使用率が低いことと関連していた（調整オッズ比 0.61、95%信頼区間 0.42–0.89）。

本研究の結果は、日本人患者におけるCOVID-19の良好な予後因子として、下痢症状の存在があることを示唆した。